

中学生サッカー選手のパーソナリティに関する検討：ポジションに着目して

中澤, 史 / NAKAZAWA, Tadashi / MATSUOKA, Yuta / 松岡, 悠太

(出版者 / Publisher)

法政大学スポーツ研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

BULLETIN OF Sports Research Center, HOSEI UNIVERSITY / 法政大学スポーツ研究センター紀要

(巻 / Volume)

37

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

2019-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021855>

中学生サッカー選手のパーソナリティに関する検討 —ポジションに着目して—

A study on the personality of junior high school soccer players
— Consideration about the position —

松 岡 悠 太 (法政大学スポーツ健康学部)

Yuta Matsuoka

中 澤 史 (法政大学国際文化学部・スポーツ健康学研究科)

Tadashi Nakazawa

要 旨

本研究では、育成年代に該当する中学生サッカー選手を対象に、ポジションごとのパーソナリティの差異及び傾向を検討した。調査対象者は、中学生のサッカー選手、合計 125 名 (平均年齢 13.47 ± 0.93 歳：全て男子) であった。個人のパーソナリティを客観視するために開発されたパーソナリティ検査であるエゴグラムを用いて、ポジション (FW, MF：トップ下・サイドハーフ・ボランチ, DF：センターバック・サイドバック, GK) ごとの心理特性を検討した。その結果、FC の自我状態の項目において、FW とボランチ及び FW とサイドバックのポジション間で有意な差が認められた。また、細分化した MF と DF のポジション間でも、それぞれ特徴的なパーソナリティ傾向が認められた。今回の結果から、各ポジション間でパーソナリティの差異及び傾向があることが明らかとなった。このことから、育成年代に該当する中学生において、ポジションの決定や転向を考える際に、技術や戦術、体格という基準に加え、選手のパーソナリティという新たな基準を設けて考える必要性があることが示唆された。

キーワード：パーソナリティ, サッカー, ポジション

Key words: Personality, Soccer, Position

I. はじめに

わが国ではスポーツに必要な要因として「心技体」という言葉が頻繁に使用されており、黒田 (2017) は、「心」が 50%、「技」が 30%、「体」が 20% という割合での指導が育成年代には適切であると述べている。日本サッカー協会 (2009, 以下 JFA) は、「育成年代の心の成長には長期的な視点に立って働きかけていくことが必要」と述べている。また西野 (2016) は、スポーツ競技では様々な機器の発展や進化が、パフォーマンス発揮に多大な影響を与えているが、近年そのようなハード面のみならず心理的側面といったソフト面にも注目が集まっていると報告している。これらに鑑みると、スポーツを実践及び指導する上で、より自他の心に配慮する必要性があると考えられる。スポーツ・体育分野における心に関する先行研究を概観したところ、スポーツや体育が、教育の一環として捉えられてきた歴史的事実が示すように、スポーツ経験が、競技者のパーソナリティに及ぼす影響に関する研究が数多く報告されている (渡邊, 2002)。例えば、中澤 (2011) は、パーソナリティ検査の一つであるエゴグラムを用いて、スポーツを通じて 5 つの自我状態 (表 1) の中で CP と NP の自我状態の成長が促進されることを明らかにしている。松岡ら (2018) は、育成年代のサッカー選手について、学年別、競技レベル

別、ポジション別などの様々な角度からパーソナリティ特性を検討しており、ポジション別の観点について、FW の選手は DF の選手よりも積極的かつ活動的なパーソナリティを有しており、ポジションごとに獲得されるパーソナリティが異なる可能性がある指摘している。また、角川と高宮 (1987) や加藤と武田 (1962) は、大学の体育学部在籍する学生は、一般学生に比べ、活動的、外交的な傾向が強いと報告している。さらに、野口ら (1957) や林 (1985) の報告に鑑みると、スポーツ経験の多い者ほど、スポーツがパーソナリティに及ぼす影響を強く受け、運動部での生活経験年数が長くなるにしたがって、一般学生より活動性や社会的外向性が增大すると言及している。このように、これまでスポーツとパーソナリティに関する多くの研究が試みられてきた。

しかし、集団スポーツにおけるポジション毎のパーソナリティを扱った研究に着眼すると、その数は限られる。大久保と永野 (2014) は、バレーボール選手において各ポジションの特徴がエゴグラム上に認められたと報告しているが、ゴール型スポーツにおけるこの分野に関する研究は、いまだ未開拓な部分が多い (渡邊, 2002)。心理的側面の重要性は、多くの研究で明らかになっているにもかかわらず、チーム構成や指導を行う際に、個々のパーソナリティを踏まえてポジション

を考えることは、軽視されている。坂井・柳原(1980)は集団スポーツでポジションが決められている種目において、ポジション別の性格特性があると述べている。また、Stiehler(1993)は、競技者を最適なポジションに配置することは、ボールゲームにおいて勝敗を決定するほど大きなウエイトを占めると述べている。さらに、渡邊(2002)は、選手を各ポジションに配置する際、個々の体格・運動能力・技術に加え、心理特性を踏まえた配置を試みることによって、効果的かつ計画的なチーム作りを進めることができると報告している。以上に鑑みると、集団スポーツにおいてチーム作りをする上で、様々な視点から選手の特性を考慮し、最適なポジションでプレーをさせるというのは、指導者の重要な仕事であると考えられる。

笹川スポーツ財団(2016)の報告によると、サッカー競技の個人登録者数は99万5,670人と国内で一番多い。しかし、スポーツ心理学の分野においてサッカー選手のポジション別のパーソナリティを扱った研究は、先の松岡ら(2018)や山本(2012)が散見される程度である。ただし、これらの研究では、対象者数がそれぞれ50名、35名と少ないといった課題が残る。また、これらの研究ではポジションをGK・DF・MF・FWに分類し、各ポジションにおけるパーソナリティの特徴について検討をしているが、瀧本(2001)の「サッカーにおけるポジションはGK・DF・MF・FWの4種類に分けられるのが一般的だが、実際にチーム戦術や選手の説明をするときは、さらに細かい呼称が用いられている」という報告に鑑みると、GK・DF・MF・FWというポジションの分け方は実情を反映するには不十分であると考えられる。例えば、MFであればトップ下とボランチ、またDFであればサイドバックとセンターバックのように細分化することが可能である。

さらに、パーソナリティを考える上では発達段階についても考える必要がある。JFA(2009)は、中学生から高校生の年代は、「人間としての成長」として非常に重要な時期であることを理解した上で、指導者として関わるのが大切であり、アイデンティティを確立する大切なステップであると提言している。すなわち、特に自我を確立しようと模索している育成年代において、パーソナリティにも着目した指導は重要であると考えられる。

先の中澤(2011)や大久保と永野(2014)の研究では、スポーツ経験や集団スポーツにおけるポジションがパーソナリティに影響を及ぼすことが明らかにされてきたが、その多くは対象者が大学生等の発達段階が進んでおり、自我がある程度確立されている時期のものであった。

そこで本研究では、対象者を育成年代に相当する思春期の中学生とし、さらにポジションをより細分化した上で、サッカーにおけるポジションごとのパーソナリティの差異及び傾向について検討する。

II. 方法

1. 調査時期

2018年7月

2. 調査対象者

調査対象者は、中学生のサッカー選手、合計125名(平均年齢13.47 ± 0.93歳：全て男子)

3. 調査方法

フェイスシート及び桂式自己成長エゴグラム(桂ら, 1999, 以下エゴグラム)を用いた集合調査法による質問紙調査を行った。フェイスシートでは氏名、年齢、学年、競技経験年数、家族構成(任意)、ポジション、ポジション経験年数の記入を求めた。フェイスシート及びエゴグラムについて事前に説明し、1週間後に回収する旨を伝え配布した。なお、指導者および被験者に調査の主旨ならびに倫理規定について説明し了承を得たうえで調査を実施した。

なお、ポジションの細分化については、先方の主任指導者と相談し、1.FW、2.MF(トップ下)、3.MF(サイドハーフ)、4.MF(ボランチ)、5.DF(センターバック)、6.DF(サイドバック)、7.GK(ゴールキーパー)の7区分とした。

4. 分析方法

各ポジションにおける選手のパーソナリティの差異及び傾向について検討するため、エゴグラムの5つの尺度ごとに一元配置分散分析を行い、事後検定としてBonferroni法による多重比較を行った。また、それぞれのエゴグラムの得点(パーセントイル)を用いて、エゴグラムプロフィールを図示することで検討した。ここでは、水元と竹内(2008)に倣い、優位水準(p 値)と効果量(η^2)を総合的に解釈することとした。なお統計学的有意水準は全て5%とし、分析にはSPSS20.0を用いた。

5. エゴグラム

エゴグラムは、1957年、エリック・バーンが提唱した交流分析理論に基づき、ジョン・M・デュセイによって創始されたパーソナリティ検査である(佐々木ら, 2011)。エゴグラムは人間の自我状態を5つに分類し、パーソナリティを可視化できるように考案されたもので、デュセイは、エネルギー一定の仮説を提示しており、自我状態が変化したとしても、その合計は常に一定であるとしている(佐々木ら, 2011)。エゴグラムでは、50の質問項目に3件法(はい：2点、どちらでもない：1点、いいえ：0点)で回答し、表1に示す5つの自我状態の発生頻度をとらえ、パーソナリティの特性を図式化して表す。

Ⅲ. 結果及び考察

各ポジションにおけるエゴグラム得点の平均値について分析したところ、表2の通りとなった。なお、デュセイは(1997)は、エゴグラムは被験者の心的エネルギーの量を示すとともに、その独特な形から被験者のパーソナリティの理解を可能にする手段となりえると指摘していることから、本研究ではエゴグラムの位置や形に注目して考察を加える。

1. FW とボランチ、サイドバックのパーソナリティの相違

表2の通りFCの自我状態において、FWとボランチ、FWとサイドバックのそれぞれで有意な差が認められた。また、FW、ボランチ、サイドバックのパーソナリティをエゴグラムに表したものが図1である。

FWは、相手ゴールに一番近い場所に位置し、得点をとることが期待されているポジションである(FC町田ゼルビアオフィシャルサイト, 2017)ということに鑑みれば、積極性や活動性のFCの自我状態に基づく心性は、他のポジション以上に不可欠であると考えられる。

ボランチは、ピッチの中央でDFとFWの真ん中に位置し、攻撃と守備の両方に関わるポジションである(松尾, 2013)。すなわち、ボランチというポジションには、攻守におけるバランスを意識してプレーすることが求められる。そのため、FWとは異なり、5つの自我状態が均等となる平坦型のエゴグラムが形成された可能性がある。FWとサイドバックにお

けるFCの自我状態の相違については、先の松岡ら(2018)の「FWの選手はDFの選手よりも積極的かつ活動的なパーソナリティを有している」という報告を支持する結果となった。DFの一番の役割はフィールドプレイヤーの最後尾でゴールを守ることである。一方、FWの選手にはゴールを奪うために前線で創造的・主体的なプレーが要求される。このことを踏まえると、堅実な守備力が求められるサイドバックの選手のFCの自我状態がFWの選手ほど高位とはならなかったことが了解できる。

2. MF におけるパーソナリティの相違

統計分析では有意差を認めなかったが、以下ではデュセイ(1997)に基づきエゴグラム(図2)を用いて検討する。

トップ下では、FC、A、CPの自我状態の順に高い逆N型のエゴグラムが、サイドハーフでは、FCとCPの自我状態が高位の逆N型のエゴグラムが、またボランチではややAの自我状態が低位の平坦型のエゴグラムが示された。

トップ下は、FWのすぐ後ろに位置し、アシストや自らシュートを打つなど、得点することに強く関わるポジション(FC町田ゼルビアオフィシャルサイト, 2017)であり、サイドハーフは、サイドを突破し相手ゴール前まで侵入することや試合の状況によってはFWに近いポジションでプレーすることもある。こういった攻撃的なプレーが求められていることから、FCの自我状態が最も高位になったと考えられる。

表 1 5つの自我状態(中澤,2016)

CP	：義務感，責任感，信念，理想の追求などの側面に関わる心性
NP	：受容，思いやり，自他の心身の育成などの側面に関わる心性
A	：論理性，合理性，客観性，計画性などの側面に関わる心性
FC	：自主性，活動性，積極性，創造性などの側面に関わる心性
AC	：協調性，社会性，妥協，依存などの側面に関わる心性

表 2 ポジション別のエゴグラム得点比較 (n=125)

	M (SD)							F値	p値	多重比較	η^2
	1(n=23)	2(n=8)	3(n=21)	4(n=17)	5(n=29)	6(n=16)	7(n=11)				
CP	56.30 (28.39)	55.00 (30.48)	56.00 (33.23)	57.47 (27.69)	63.93 (28.58)	33.69 (22.34)	53.82 (17.64)	2.08	.060		.100
NP	58.57 (28.62)	45.75 (30.33)	52.33 (26.27)	57.59 (31.33)	56.55 (28.93)	38.75 (24.54)	56.18 (24.04)	1.11	.360		.050
A	49.61 (31.48)	59.38 (19.34)	46.43 (26.77)	51.41 (30.22)	50.66 (29.21)	38.31 (29.31)	48.00 (22.69)	0.62	.714		.030
FC	82.83 (14.16)	64.00 (27.31)	68.62 (25.35)	57.47 (25.76)	68.34 (29.08)	54.69 (27.80)	64.27 (17.97)	2.74	.016	1>4, 1>6	.120
AC	50.61 (33.81)	43.13 (11.62)	51.19 (31.76)	59.06 (25.77)	53.66 (26.53)	53.50 (36.40)	58.27 (28.57)	0.36	.902		.020

Note) df: 6, 118

1.FW, 2.MF(トップ下), 3.MF(サイドハーフ), 4.MF(ボランチ), 5.DF(センターバック), 6.DF(サイドバック), 7.GK(ゴールキーパー)

η^2 : Small=0.01, Medium=0.06, Large=0.14(水元と竹内, 2008)

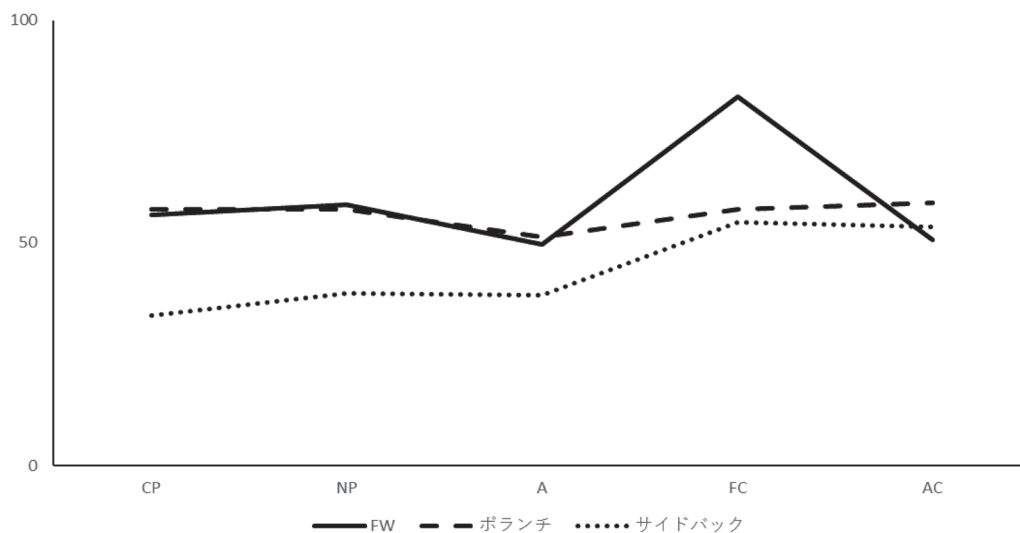


図1 FW, ボランチ, サイドバックのエゴグラム

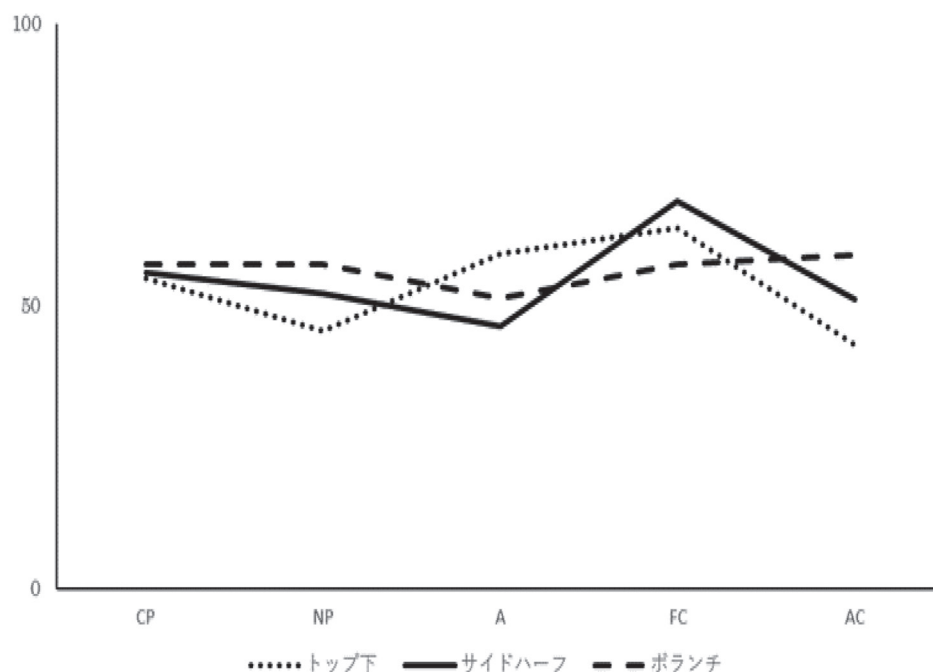


図2 ポジション別に見たMFのエゴグラム

福西(2013)は、ボランチについて先の松尾(2013)と同様、ボランチの仕事は攻撃と守備が両方あり、常に周りの状況を確認することが重要であると述べている。すなわち、ボランチには、攻守において周りの状況を常に確認しながらバランスよくプレーすることが求められる。また、フィールド中央でのプレー機会の多さは、FWとDFの選手を繋ぐ役割が求められる。つまり、より周囲との関わりやバランス感覚が必要なポジションである。このような状況が平坦型のエゴグラムに反映されたと思われる。

3. DFにおけるパーソナリティの相違

図3の通り、センターバックは、CPとFCの自我状態を頂点とする逆N型のエゴグラムを示した。一方サイドバックはCPが低位、FCとACの自我状態が高位なC優位型のエゴグラムであった。

CPとFCの自我状態が高位な逆N型のエゴグラムを示したセンターバックについて岩政(2017)は、ゴール前の責任はいつもセンターバックにあると述べている。また、センターバックの逆N型のエゴグラムからは、「失点はしない」といったCPの自我状態に基づく頑固な責任感や意志の強さとも

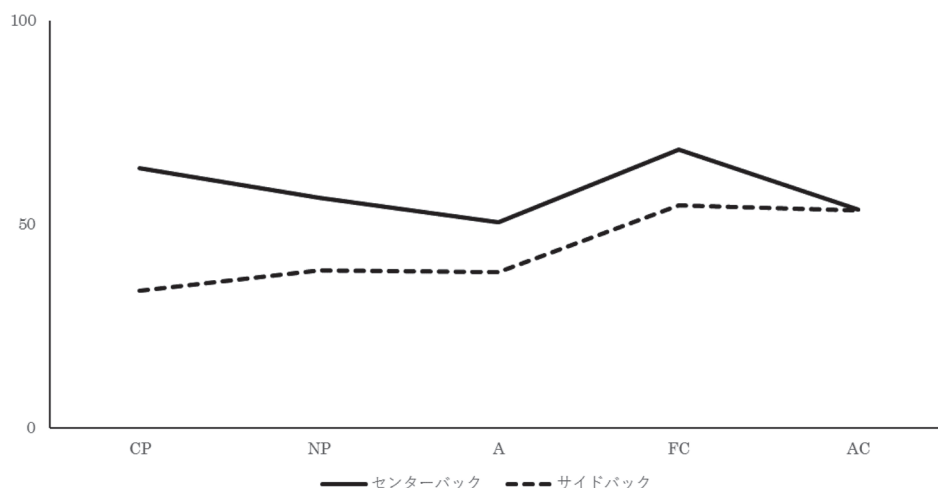


図3 ポジション別に見た DF のエゴグラム

に、FC の自我状態に基づく主体的・積極的な思考・行動様式が感じられる。

C 優位型のエゴグラムを示したサイドバックについて、岸本(2012)は、現代サッカーでは攻撃の起点がサイドになっており、サイドバックが攻撃参加をすることにより前線での数的優位をつくり、サイドを崩す攻め方が増えていると述べている。また、大矢(2016)は、サイドバックの攻撃参加は攻撃に厚みをもたらし、試合の勝敗に影響を及ぼすと報告している。このような守備だけではなく、攻撃も重視されるポジション特性が、サイドバックの FC の自我状態を促進した要因であろうと考えられる。他方、我慢や忍耐などを象徴する AC の自我状態も同様に高位であることについては次のように考えられる。つまり、先述のサイドバックの特性上、サイドバックの選手には、攻撃参加のために前線に移動した後、瞬時にディフェンスラインまで戻るといった役割が試合中常に求められる。この役割には相当量の心身のエネルギーを要することになり、それには相当な忍耐力や我慢が強いられる。このことを踏まえると、サイドバックの AC の自我状態が高位であることも了解できる。

以上のように、各ポジションにおけるパーソナリティの傾向が示された。特に、従来 MF や DF として一括りにされ研究がなされていたポジションにおいて、それぞれのポジションを細分化することで各ポジションにおいてパーソナリティ傾向に違いが見られたことは新たな発見となった。ここでの知見は、実情を反映するためには、従来の 4 つの GK・DF・MF・FW のポジションを現状に合致するよう細分化し、それぞれのポジションにおけるパーソナリティについて検討することの必要性を示唆していると考えられる。また、複数名の育成年代の指導者にインタビューをし、コーチング・メンタルモデルについて検討した古賀と堀野(2013)は、すべての指導者に「人間力の向上」が共通していたと報告している。このことに鑑みると、育成年代に該当する中学生において、ポジ

ションの決定や転向を考える際に、技術や戦術という基準に加え、選手のパーソナリティという新たな基準を設けて考える必要があると考えられる。

V. まとめ

本研究の目的は、育成年代に該当する中学生サッカー選手を対象に、ポジションごとのパーソナリティの差異及び傾向を確認するものであった。個人のパーソナリティを客観視するために開発されたパーソナリティ検査であるエゴグラムを用いて、ポジション(FW, MF: トップ下・サイドハーフ・ボランチ, DF: センターバック・サイドバック, GK) ごとの心理特性を検討した。その結果、FC の自我状態の項目において、FW とボランチ及び FW とサイドバックのポジション間で有意な差が認められた。また、細分化した MF と DF のポジション間でも、それぞれ特徴的なパーソナリティ傾向が認められた。今回の結果から、各ポジション間でパーソナリティの差異及び傾向があることが明らかとなった。

本研究の限界について、次の 4 つの課題が挙げられる。まず、1 つ目として、ポジションを細分化したことにより、各ポジションにおけるサンプル数が少なくなってしまうことである。2 つ目として、本研究では 2 チームを対象としたので、今後は様々な競技レベルのチームで調査をすることが必要である。3 つ目として、対象者が中学生のみであり、各発達段階の選手を対象に検討することができなかったことが挙げられる。4 つ目として、ポジションの変更がパーソナリティにどのように影響を及ぼすのかについて明らかにできなかった。今後は、多様な競技レベル及び発達段階を対象に調査を実施し、サッカーのポジションとパーソナリティの関係について解明する必要がある。また、縦断的に調査により、選手のパーソナリティとポジションの関係について質的分析も施す必要もある。つまり、ポジションを継続することによって選手のパーソナリティがポジションに適したものへ

変化をするのか、それとも各ポジションに適したパーソナリティを有する選手が適材適所のポジションに収まっていくのか、といった課題について検討する必要がある。

引用・参考文献

1. デュセイ：新里里春訳(2007) エゴグラム：ひと目でわかる性格の自己診断. 創元社. John M. Dusay (1977) EGOGRAMS: How I See You and You See Me. HarperCollins. pp. 18-20.
2. 福西崇史(2013) ボランチ専門講座. 東方出版株式会社. pp. 10-21.
3. FC 町田ゼルビアオフィシャルサイト サッカーのポジション紹介 <http://www.zelvia.co.jp/>.
4. 林正邦(1985) スポーツと人間形成について—スポーツが個人的性格におよぼす影響について—. 天理大学学法天理大学人文学会, 第 146 巻第 3 号, 68-69.
5. 伊東未来・松岡悠太・高橋和之・梶内大輝・新海裕輝く・中澤史(2018) ジュニアサッカー選手のパーソナリティに関する検討—競技レベル・学年・ポジションに着目して—. 九州スポーツ心理学研究第 30 巻第 1 号, 46-47.
6. 岩政大樹(2017) 元日本代表・岩政大樹が書く「勝つためのセンターバック像」. <http://best-times.jp/articles/-/4724?page=3>.
7. 桂載作・芦原睦・村上正人(1999) 自己成長エゴグラムのすべて—SGE マニュアル. 株式会社チーム医療. pp. 13.
8. 加藤等・武田徹(1962) 運動選手の性格特性. 体育学研究第 7 巻第 1 号, 16.
9. 角川雅樹・高宮靖(1987) 体育学部学生の性格に関する調査研究：MMPI による検討. 東海大学紀要体育学部第 17 巻, 27-36.
10. 岸本淳佑(2012) 現代サッカーにおける攻撃面でのサイドバックの重要性. びわこ成蹊スポーツ大学卒業研究抄録集(スポーツ学部) 2011 年度.
11. 黒田剛(2017) 勝ち続ける組織の作り方—青森山田高校サッカー部の名将が明かす指導・教育・育成・改革論. 株式会社キノブックス. p. 23.
12. 古賀康彦・堀野博幸(2013) J リーグクラブ・ユース指導者と高等学校サッカー部指導者との指導哲学の比較. 体育学研究第 10 巻, 173-182.
13. 松尾和樹(2013) 大学サッカー選手におけるパスの種類と成功率の関係. びわこ成蹊スポーツ大学卒業研究抄録集(スポーツ学部) 2016 年度.
14. 水元 篤・竹内 理(2008) 研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—. 英語教育研究第 31 巻, 56-66.
15. 中澤史(2011) エゴグラム療法によるアスリートへの心理サポートの検討—自我発達と心理的競技能力および社会的スキルの獲得. 財団法人上月スポーツ・教育財団スポーツ研究助成事業研究論文 http://www.kozuki.or.jp/ronbun/spresearch/spres06_nakazawa.pdf.
16. 中澤史(2016) 勝者のメンタリティを手に入れるアスリートの心理学 選手・指導者・保護者のためのメンタル・ハンドブック. 日本文化出版. p. 78.
17. 西野明(2016) 心理的競技能力におけるスポーツ選手の自己理解. 千葉大学教育学部研究紀要第 64 巻, 209-211.
18. 日本サッカー協会(2009) 育成年代の指導者のかかわり iii メンタルケア http://www.jfa.or.jp/coach_referee/topics/2009/26/09.pdf.
19. 野口義行・岡部弘道・野口広敏・近藤衛・和田寿・山崎剛(1957) 運動選手の性格特性についての研究. 体育学研究第 2 巻第 5 号, 227-173.
20. 大久保純一郎・永野希美子(2014) 女子バレーボール選手における人格特性とメンタルヘルスの関係—エゴグラムとポジションに着目して—. 帝塚山大学心理学部紀要第 3 巻, 11-17.
21. 大矢真太郎(2016) UEFA チャンピオンズリーグにおけるサイドバックの攻撃. びわこ成蹊スポーツ大学卒業研究抄録集(スポーツ学部) 2016 年度.
22. 坂井学・柳原英児(1980) サッカー選手のポジション別性格特性について. 日本体育学会大会予稿集第 31 巻, 674.
23. 笹川スポーツ財団(2016) 研究レポート「中央競技団体現況調査 2016」.
24. 佐々木一帆・奥森拓也・片上大輔(2011) エゴグラムを利用した社会判定エージェント Sociality Judgment Agent based on Egogram. HAI シンポジウム 2011 Human-Agent Interaction Symposium 2011 III -1 A-3.
25. Gunther Stiehler (原著), Hugo Dobler (原著), Irmgard Konzag (原著), 唐木 国彦 (翻訳) (1993) ボールゲーム指導辞典. 大修館書店.
26. 瀧本周平(2001) サッカーエージェントの行動決定過程における戦術の役割. 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科知識社会システム学専攻修士論文.
27. 山本雄大(2012) サッカーにおけるポジションと性格比較 The comparison between position and personality in football. 早稲田大学スポーツ科学部卒業論文要旨集(2012 年度).
28. 渡邊大志(2002) ハンドボール競技のポジションに付与される役割が行動様式に与える影響. 平成 14 年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科修士論文.